

Title	飯田下伊那調査記
Sub Title	長野県飯田下伊那調査記 Field report in Iida City and Shimo-ina County, Nagano Prefecture
Author	飯倉, 江里衣(likura, Erii) 大石, 茜( Ohishi, Akane) 大野, 絢也( Ohno, Junya) 甲賀, 真広( Koga, Masahiro) 佐藤, 量( Sato, Ryo) 森, 巧( Mori, Takumi)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2023
Jtitle	満洲の記憶 No.9 (2023. 12) ,p.123- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20231200-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20231200-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 飯田下伊那調査記

飯倉江里衣、大石茜、大野絢也、甲賀真広、佐藤量、森巧

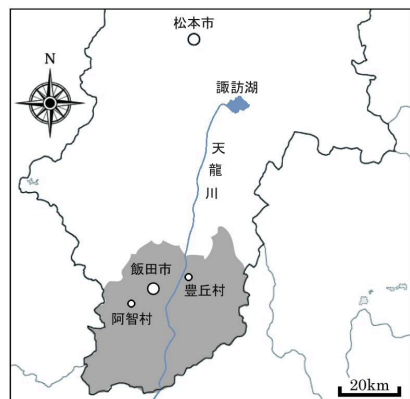
## はじめに

2023年9月7日から8日にかけて、本研究会の有志6名（飯倉江里衣、大石茜、大野絢也、甲賀真広、佐藤量、森巧）で長野県飯田市および下伊那郡豊丘村・阿智村にて調査を行った。本調査では、訪問した先々で関係者による丁寧な説明を受けたほか、フィールドワークや史料調査を行うことができた。以下では、時系列に沿って調査概況を述べる。

## 1 故久保田諫氏墓参

研究調査1日目の午前、飯田市歴史研究所の本島和人氏による案内のもと、故久保田諫氏ゆかりの豊丘村を訪問した。伊那谷の東岸に位置する豊丘村は開拓移民を多く送出した地域であり、戦後にその関係の慰霊碑や記念碑などが多く建立されたという。当日は、本島氏と豊丘村「交流学习センター ゆめあるて」で合流したのち、まず豊丘村「海外犠牲者慰霊碑」を訪れ、献花を行った<sup>1</sup>。この慰霊碑に書かれた説明によれば、慰霊碑は満洲開拓犠牲者の遺骨が中国より返還され始めたころ、引揚関係者の

図1 飯田下伊那地図



作成：大野絢也

間で建立計画が持ち上がり、建立されたとのことである。1974年8月15日に除幕式が行われ、慰霊碑には当時の県知事（西沢雄一郎）の揮毫もある。慰霊碑の両側には、開拓団、自由移民、義勇軍などとして満洲へ渡り、犠牲となった400余命に及ぶ方々の名前が刻まれている。本島氏からは、近年、満洲に渡った人々が故郷の村へ送った書簡が発見され、新たな研究の可能性が生まれているという大変興味深いお話を伺うことができた。

図2 慰霊碑について解説する故久保田諫氏

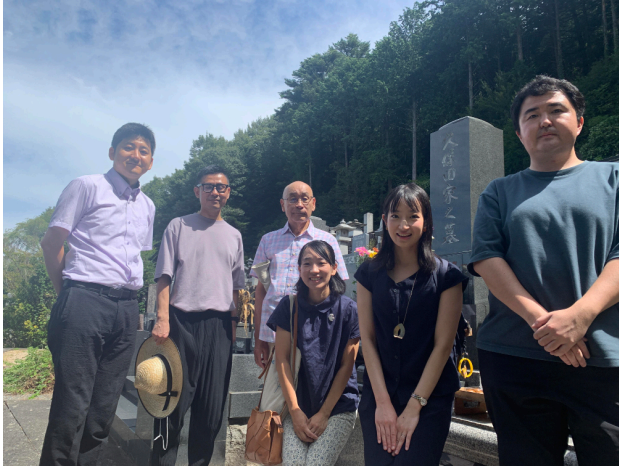


撮影日：2015年9月21日 撮影者：大野絢也

その後、久保田氏の眠る泉龍院へ墓参した。久保田氏は、河野村開拓団の一員として1944年5月に新京石碑嶺に渡り、敗戦時に開拓団村で起こった「集団自決」の中で唯一生き残って河野村（現豊丘村）に帰って来た方である。久保田氏と研究会の関係は深く、2015年に数回、久保田氏宅へ会のメンバーがインタビューのために訪問した。また久保田氏には一橋祭での研究会講演企画でご講演いただくなど、会の活動にご協力いただいた。その際に久保田氏から伺った満洲での経験談は今でも印象深いものである。墓の前では、久保田氏が話された内容だけでなく、記憶を語る時の表情や様子までが思い出された。今回の墓参は、本島氏や研究会のメンバー

がともに、改めて当時の活動を思い起こす機会となった。パンデミックの状況下でしばらく久保田氏に会うことができず、このようなかたちでの「再会」となってしまったことは悔やまれてならない。しかしながら、調査に参加したメンバー全員で久保田氏への感謝の意を伝え、改めて久保田氏のご冥福を祈った。

図3 久保田氏の墓前にて



撮影日：2023年9月7日 撮影者：甲賀真広

その後も、本島氏の案内で久保田氏にゆかりのある場所を巡った。本島氏によると、もともと天竜川に架かる万年橋の近くに久保田氏の生家があり、久保田氏の思い出話の中では万年橋が心象風景としてよく出てきたという。万年橋を渡った先には、豊丘村の人々がよく使う最寄り駅の飯田線山吹駅があり、そちらも見学した。久保田氏が若い頃は、山吹駅や伊那大島駅の近くまで遊びに行くこともあったという。現在はローカル線の小さな駅だが、戦時中は出征や開拓移民の送出で多くの人々が集まり見送りに来ていたらしい、というお話も本島氏から伺うことができた。また、久保田氏が満洲から豊岡村へ戻って来た日、山吹駅に着いたのは昼間であったが、「集団自決」を唯一生き残って帰って来てしまったという負い目により人目を気にするあまり、すぐに豊丘村へ帰るのを控え、日が沈み暗くなるまで駅で待ったとのことである。山吹駅から自宅までの帰り道、久保田氏が悲痛な想いで通ったで

あろう道から豊丘村を眺め、思いを馳せた。

図4 久保田氏の生家近くの万年橋



撮影日：2023年9月7日 撮影者：大石茜

図5 山吹駅近くから見た伊那谷。天竜川の対岸に豊丘村を望むことができる



撮影日：2023年9月7日 撮影者：大野絢也



## 2 飯田市平和祈念館

初日の午後は、2022年5月にオープンした飯田市平和祈念館を訪問した。飯田市平和祈念館は、飯田駅前の「丘の上結いスクエア」の3階「ムトスぷらざ」の一角にあり、同階の飯田駅前図書館やシェアスペースでは、幅広い年齢層の人々が思い思いに過ごしており、地域の交流の拠点となっている様子がうかがえた。今回の訪問では、市民団体である「平和祈念館を考える会」等で活動する3名とお会いし、飯田市平和祈念館設立までの歴史や、現在の平和祈念館をめぐる状況について話を伺った。

図6 飯田市平和祈念館



撮影日：2023年9月7日 撮影者：大石茜

飯田市では1991年8月に、この地域の戦争展としては初めての「第4回平和のための信州・戦争展」が開催された<sup>2</sup>。この戦争展の来場者アンケートにおいて、戦争展の常設を望むと回答した数が過半数に及んだことをうけ、飯田市では戦争展の常設展示が模索されはじめた。2000年、平和祈念館設置の請願が飯田市議会に提出され、全会一致で採択された。2001年には飯田市教育委員会を事務局とする飯田市平和資料収集委員会が組織され、展示に向けた史料の収集がはじまった。1,800点に及ぶ史料が集まり、2022年5月に飯田市平和祈念館が開館した。

開館にあたり飯田市教育委員会は、当初予定されていた展示のうち、731部隊に

関するパネルについて、事実関係に議論があるとして展示を見送った。2022年夏に、信濃毎日新聞を中心とするマスメディアによってこのことが報じられ、飯田市教育委員会の対応に注目が集まった。2023年2月、飯田市教育委員会によって「飯田市平和祈念館展示・活用検討委員会」が組織され、平和祈念館の展示のあり方をめぐる議論が現在も続いている。市民の間でも動きがあり、2023年1月に「平和祈念館を考える会」が結成され、学習会が続けられている。

現在の平和祈念館には、飯田市の歴史を考える上で、非常に貴重な戦時期の日用品や軍の備品、写真、手紙等が展示され、丁寧な解説のパネルが並んでいる。地域の戦争の歴史を丁寧に検証していく姿勢が伝わってくる展示であった。2023年9月1日には、当初予定されていた731部隊に関するパネルの一部が、文面の修正を経て展示に加わった。「市平和祈念館展示・活用検討委員会」や「平和祈念館を考える会」の活動によって、どのような展示へと向かっていくのか、今後の動向が注目される。

### 3 満蒙開拓平和記念館

研究調査2日目の午前、2013年4月に長野県下伊那郡阿智村にオープンした満蒙開拓平和記念館を訪問した。メンバーがそれぞれ別のかたちで訪れたことはあったものの、研究会としての訪問は今回が2回目である<sup>3</sup>。

記念館スタッフの島崎友美氏が、2019年10月に新たにできた別館セミナー棟を案内してくださった。また最近の記念館の様子を伺い、記念館制作映像「満蒙開拓の真実」(約20分)を視聴した。前回訪問した2015年4月には、開館から2年間で延べ6万人の訪問者があったということだった<sup>4</sup>。開館から10周年になる今年は、コロナ禍の約3年間を挟んだにもかかわらず、開館から延べ22万人が訪れているという。

近年の取り組みとしては、2022年4月から「自治体パートナー制度」を設け、一口年間5万円で「パートナー自治体」を募り、会報『山河』の送付、「パートナー自治体デー」の実施(当該市町村民入館無料)などを行っているという<sup>5</sup>。2023年5月8日時点では、長野県および38市町村と1広域連合が2023年度の「パートナー自治体」になっている<sup>6</sup>。現在、「パートナー自治体」は長野県内の自治体のみの参加となっているが、将来的には県外にも広げられたらということであった。

訪問当日は平日であるにもかかわらず、午前中から団体客を含め、少なくない来館者があった。コロナ禍で一時期来館者数が減ったということであるが、すっかり今では以前の賑わいを取り戻しつつあるようだ。記念館の今後の益々の発展を期待したい。

図7 満蒙開拓平和記念館



撮影日：2023年9月9日 撮影者：島崎友美（満蒙開拓平和記念館）

#### 4 飯田市歴史研究所

2日目午後は、飯田市歴史研究所（以下、飯田歴研）を訪問した。研究会としては2015年以來の訪問で、飯田歴研は以前と別の場所に移転していた。ちょうど私たちが訪問した翌日の9日には飯田歴研主催の研究集会「第20回地域史研究集会」が開催されるということで、研究所のスタッフの方々はその準備で忙しくされていたにもかかわらず、快く対応してくださった。

飯田歴研では、調査研究員の本島和人氏に事前に手配していただいた一次史料を閲覧した。『胡桃澤盛日記』と『満洲紀行』の原本に加えて、旧伊賀良村役場史料のうち、特に満洲移民関係のものを閲覧した。旧伊賀良村役場史料には、伊賀良村から満洲に渡った人々の『移民名簿』や、伊賀良村へ引揚げた人々の『海外引揚者県内定着者名簿報告綴』、引揚者の住宅事情に関する『海外引揚者住宅建築一件綴』などが含まれており、戦前から戦後にかけての伊賀良村をめぐる移住・引揚げ・再定住に至る過程を把握することができた。こうした一つの村落の多面的な史料を一



度に閲覧するということは他所ではなかなか難しく、地域の歴史を丹念に発掘してきた飯田歴研ならではのことであろう。有意義な史料調査ができた。

### おわりに

本調査においては全行程において、非常に有意義な知見を得ることができた。研究会としての訪問はコロナ禍により久方ぶりとなっていたが、そのなかでも変わったもの、変わっていないもの、新しくできたものなどさまざま確認することもできた。各訪問先でお時間を作っていただいた皆様に心より感謝申し上げる。

註

- 1 2015年9月21日にも故久保田諫氏とともに研究会の一部メンバーで豊丘村海外犠牲者慰霊祭に参加し、同地を訪問している。
- 2 長野県内の北信、東信、南信、中信の4つのエリアで順に開催しているイベントで、第4回目が南信での初開催であった。
- 3 1回目の訪問については、新谷千布美「長野県飯田下伊那地域における満洲農業移民史調査記」（『満洲の記憶』第2号、2015年、102-103頁）を参照されたい。
- 4 同上、102頁。
- 5 「自治体パートナー制度」の詳細は、当館ホームページを参照されたい（「満蒙開拓平和記念館×自治体パートナー制度」—自治体版協力会員制度—『満蒙開拓平和記念館ホームページ』<https://www.manmoukinenkan.com/whats-partner/>、2023年9月8日最終アクセス）。
- 6 「自治体パートナー紹介—2023年度パートナー自治体—」『満蒙開拓平和記念館ホームページ』<https://www.manmoukinenkan.com/partner/>、2023年9月8日最終アクセス）。